

第2章 京都大学病院構内A G13区の発掘調査

千葉 豊 富井 眞

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部附属病院の西構内、鴨川まで直線距離で150mの地点に位置する（図版1-349）。ここに、i P S細胞研究施設の新営が計画された。新営予定地は、聖護院川原町遺跡の指定範囲の内外に位置する場所にあっており、当初、その範囲内にあたる新営予定地東側部分700㎡を対象として調査を開始した。表土掘削を終了後、遺物包含層が新営予定地の西側まで広く連続していることが新たに確認されたので、新営予定地全域の発掘調査をおこなうこととした。調査期間は2008年7月28日～10月31日、調査面積は2164㎡である。

発掘調査の結果、近世から近代にかけての井戸・野壺・溝・土坑などを検出し、近世の土器・陶磁器類を主体として整理箱で123箱を数える遺物が出土した。

鴨川にほど近いこの地一帯がいつごろ安定化し人間の活動領域に取り込まれていったのかの解明は、調査にあたってのひとつの課題であった。過去の調査においては、本調査区の南東100m前後に位置する19・39・122地点では中世の遺物包含層と多種多様な遺構が検出されているにもかかわらず、その地点から西側一帯（192・198・291地点）では、中世の遺構が検出された地点はない。

今回の調査でも、近世の遺物包含層の下には砂礫が厚く堆積しており、この砂礫層からは摩滅の著しい中世の土師器類が出土したことから、中世段階ではこの地点はなお高野川系流路の氾濫原であったことが明らかになった。

江戸時代の遺物包含層は17世紀～18世紀前半と18世紀後半以降19世紀の2枚確認できた。この結果、17～18世紀前半段階に農地としての開発が開始されたこと、ただし遺構が散漫で遺物も少ないことなどから、なお本格的な開発には至らなかったことが明らかとなった。聖護院村の畑地としての本格的な開発は18世紀後半以降であり、その後この地は、絵図・地籍図などによれば幕末に練兵場となり明治期には牧畜場となってから大学敷地へと変遷していった。このように、中世以降の土地利用の変遷に関する知見を得ることができたといえよう。

なお、本章は、第1・4・5節を千葉、第2・3節を富井が分担して執筆した。

2 層 位

本調査区は、発掘調査前には駐車場であり、建物が存在しなかったため、遺物包含層の残りはよい(図1・2)。50cm前後の表土(第1層)を除去すると、18世紀後半から19世紀にかけて堆積した黒灰色土(第2層)が、調査区全域に厚さ20cm前後で広がる。黒灰色土の下位は、調査区中央北辺には無遺物の黄白色粗砂(第2'層)が部分的に堆積しているが、広く分布しているのは、18世紀前半までの遺物が出土する層厚10cm前後の淡褐色土(第3層)である。黄白色粗砂の性格は不明だが、本調査区の東方250mに位置する338地点では18世紀の土石流が確認されており〔富井・笹川2010〕、年代的には近い関係にある。淡褐色土の下位には、高野川系流路ないし鴨川による厚さ2m以上の自然堆積の砂礫層群(第4層)が堆積している。調査区西辺のY=1630よりも西側では、砂礫層群の最上部に黄褐色土が薄く広がっており、そこからは、中世の土師器や陶器の細片が目立つものの、わずかに江戸時代の陶磁器破片が出土した。

第4層の砂礫層群は、粒径3～5mm程度の粗砂層が目立つが、拳大の礫層やシルト層も介在している(図版2-3)。土師器や瓦などの細片が含まれ、中にはあまり摩滅していないものもある。ラミナの向きは総じて、東西畔では西に下がり、南北畔では非常に緩い傾斜で南に下がる。出土遺物の傾向を見ると、東辺では、上位に1段撫で手法のF類が出土

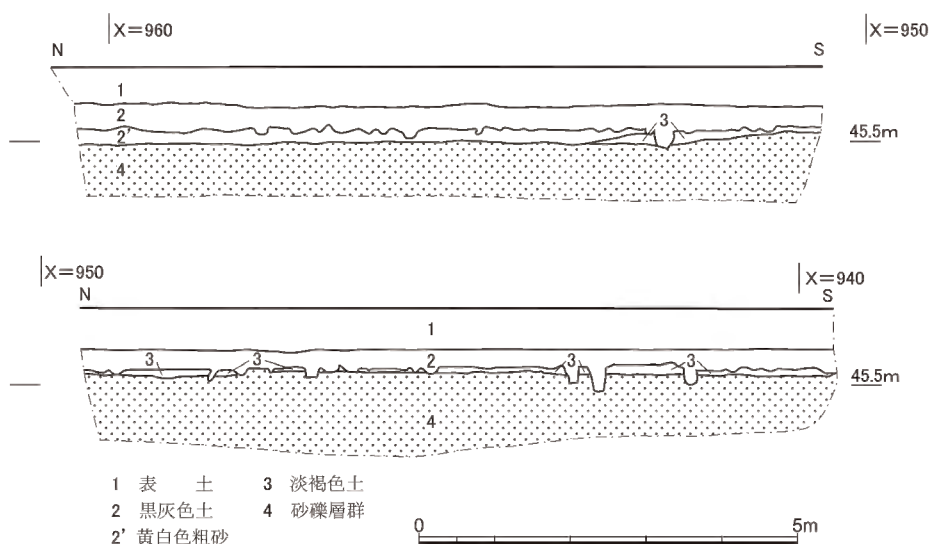


図1 南北畔(Y=1650ライン)西面の層位 縮尺1/100

層 位

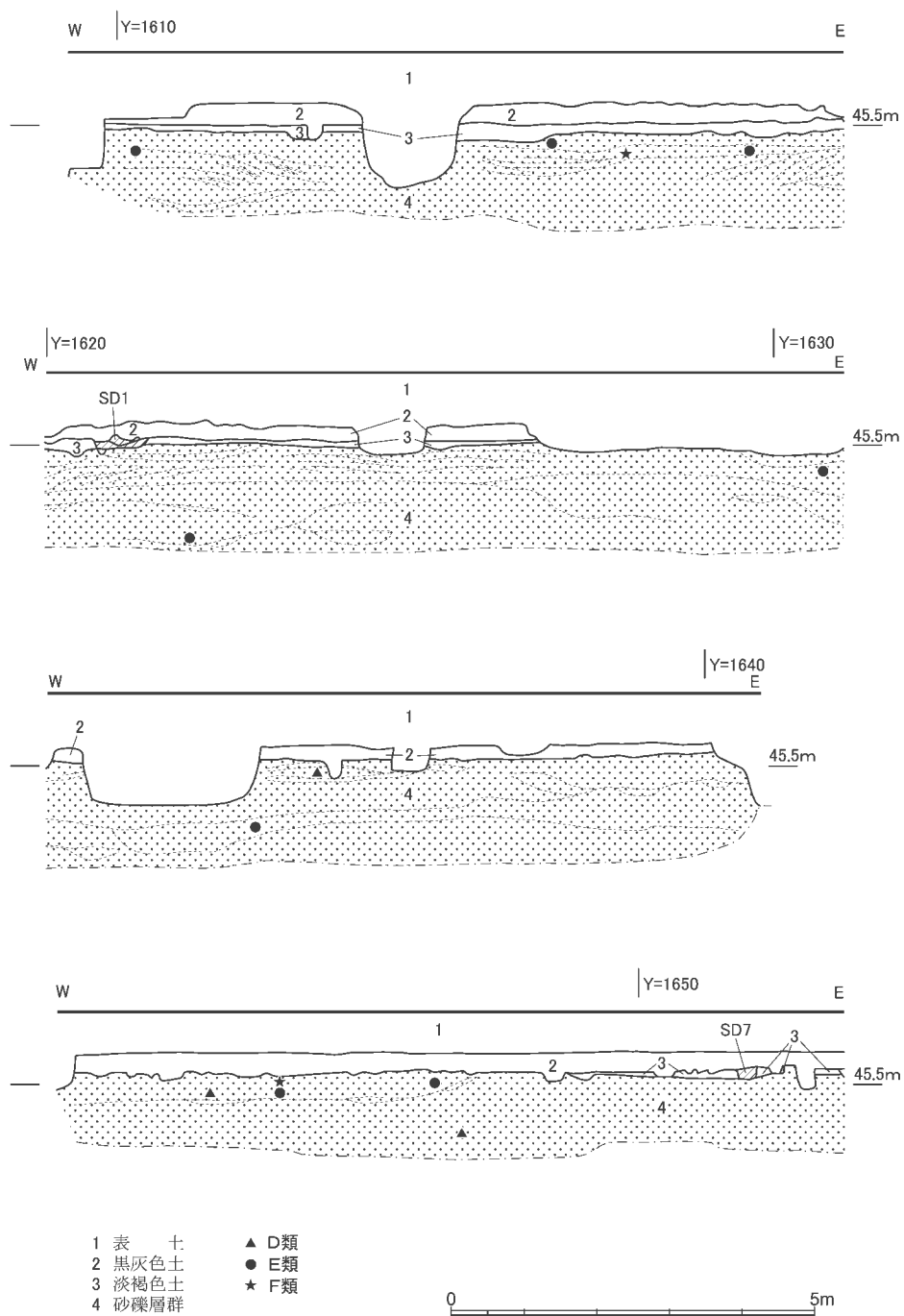


図2 東西畔 (X=950ライン) 南面の層位 縮尺1/100

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

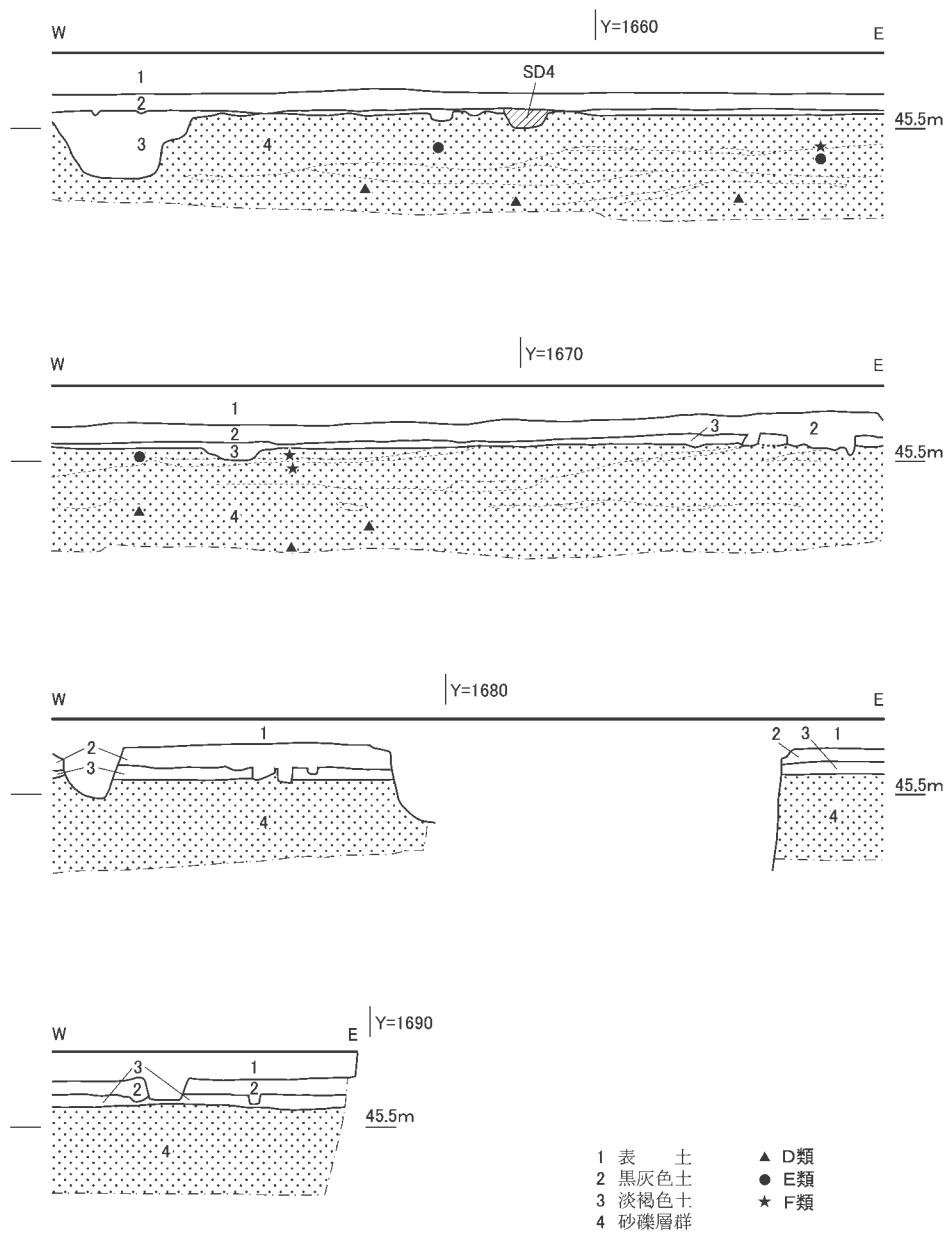


図 2 つづき

遺 構

するが、下位では、1段撫で面取り手法のD類までしか出土しない。また西辺では、現地表下2.5m程度の砂層からも1段撫で素縁手法のE類が出土する。このように、ラミナの走向と出土土師器破片の時期的傾向はおよそ整合的である。こうした状況から、13世紀ごろまで氾濫原だったこの地が、河原が徐々に西へ移動していった、16世紀ごろから水がほとんど引いていったことがうかがえる。

3 遺 構

出土遺物には、中世の土師器や陶器や輸入青磁など、包含層の形成年代よりも古いと思われる細片も含まれるが、そうした時期の遺構は認められなかった。淡褐色土を埋土とする遺構は、第4層の砂礫層群上面で検出され、17世紀から18世紀前半のものである。また、第2層の黒灰色土を埋土とする遺構は、淡褐色土や砂礫層群の上面で検出され、18世紀後半から19世紀までのものである。前者を第Ⅰ期、後者を第Ⅱ期として、以下に時期別に主な遺構の説明をする。

(1) 第Ⅰ期の遺構（図版2，図3）

SE17・18は、調査区中央東辺で検出された円形土坑で、遺物はほとんど出土していない。木製の野壺と思われる。同様の円形土坑は、調査区西辺にも2基ある。SE18と並んで検出されたSE19は石組の井戸（図版2-4）で、井戸底の標高は44.1m。上部を大きく削平されているが、残存する石組に花崗岩はほとんど含まれない。調査区東南辺で検出されたSE20は、円形の土坑で、井戸の可能性はある。底面の標高は44.8m。同様の円形土坑は東西畔内でも中央付近で確認しているが、こちらは遺物は出土しなかった。このSE20は、長方形を呈する土坑SX4に切られているが、両者の出土遺物には時期差を認められなかった。それらのさらに東側で検出されたSE21は、井筒は不明瞭だが水溜を確認できたので、木製の井戸だったと思われる。井戸底の標高は、44.3m。SE21から出土した陶器片は、SE19出土のものと接合している。

調査区中央北辺には、淡褐色土上面で、北北東から南南西にはしる溝を部分的に確認できた。埋土は淡褐色土よりやや明るい明褐色土だが、この時期の遺構と判断している。

(2) 第Ⅱ期の遺構（図版2・3，図4～6）

黒灰色土を埋土とする遺構を第Ⅱ期としたが、切り合い関係を持つ遺構があり、複数の時期の遺構群であることは明らかである。SD1・2などのように北北東から南南西に走る溝や、一辺20cmほどの方形ピットや直径20cmほどの円形ピットがこの面でもっとも古い

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

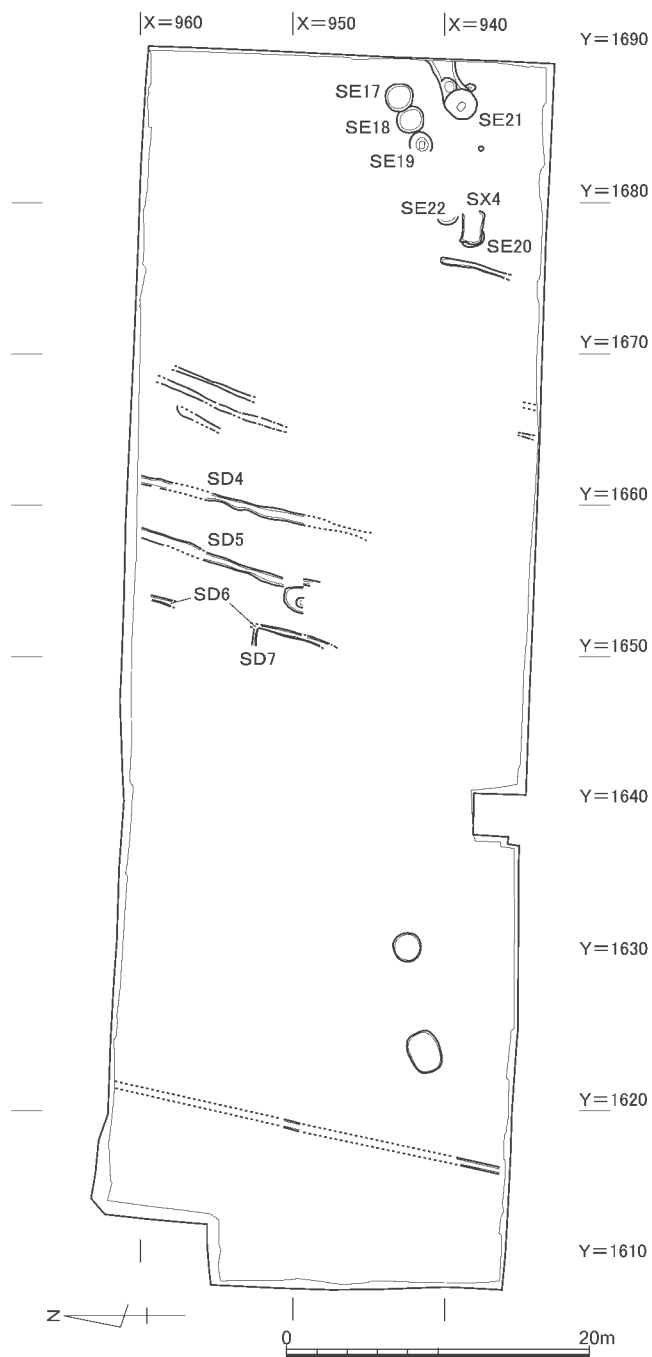


図3 近世I期の遺構 縮尺1/500

遺 構

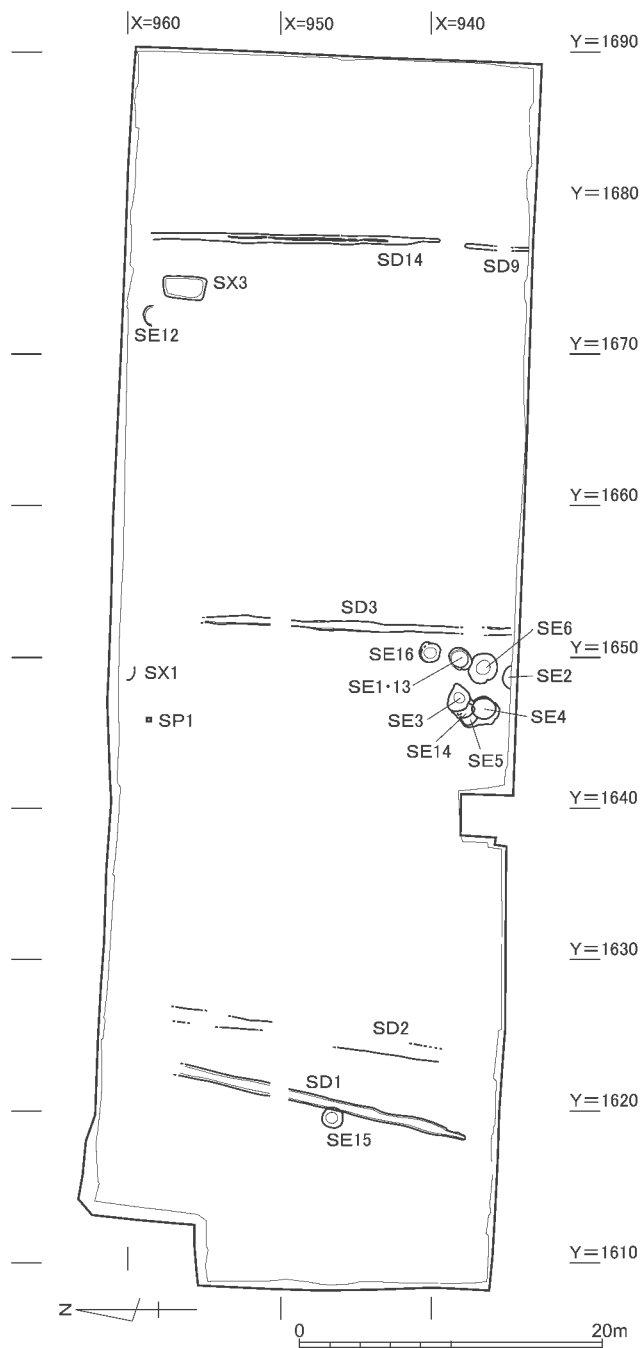


図4 近世Ⅱ期(古)の遺構 縮尺1/500

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

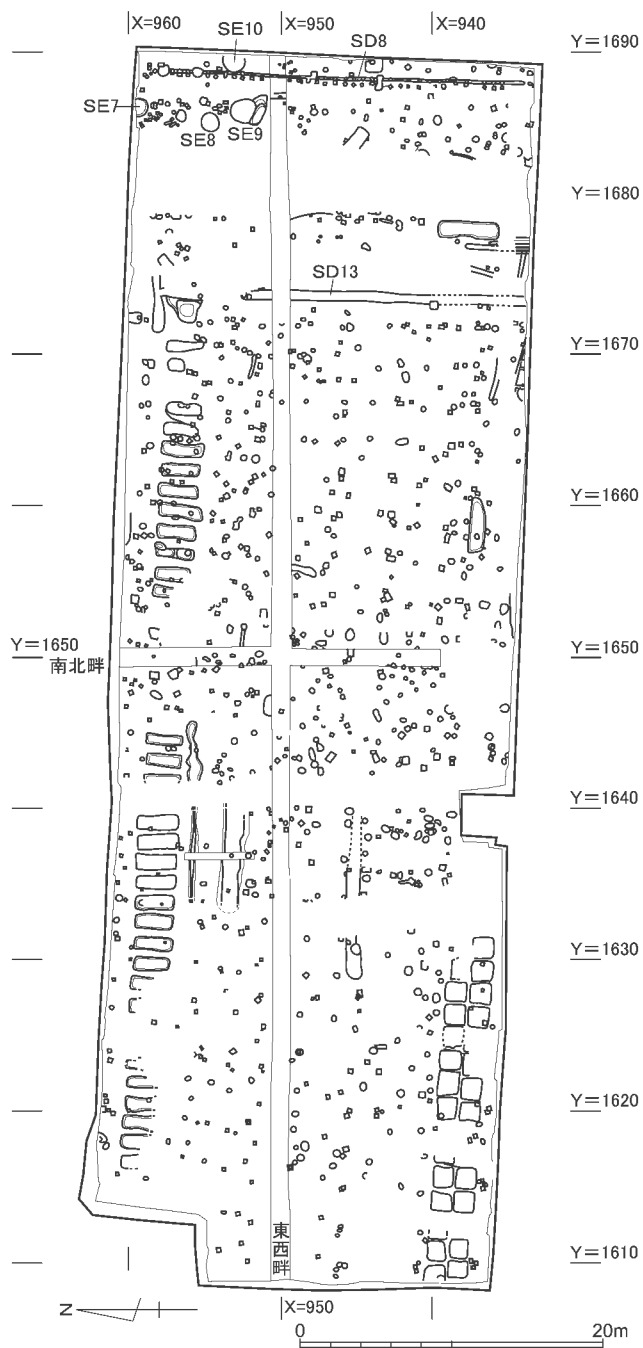


図5 近世Ⅱ期(新)の遺構 縮尺1/500

遺 構

と思われる遺構群である。20cm前後のピットの中には、第Ⅰ期の溝群におよそ直行するように、1.5～2.2m間隔で直線上に並ぶものも何列か確認できる。

こうした溝やピットを切って南北にはしる溝には、SD3・9・14などがある。そして、もっとも新しい遺構としては、調査区西南辺に二列並ぶ一辺約2mの方形土坑群と、調査区北辺に並ぶ0.5m×2m程度の長方形の土坑列がある。これらの土坑群は、ピットを切っている。またこの土坑列に挟まれた空間ではこれと平行して、東西にはしる一辺30cmほどの方形ピット列があり、それが途切れた調査区東辺には、その土坑列・方形ピット列に直交して南北方向の溝SD13がはしる。さらに、東方には、SD13に並行して南北方向にはしり、直径10cm程度の小さなピットを両脇および底面にともなう、溝SD8がある。また、調査区東辺の円形落ち込みSE10は明治期の遺物を包含していた。なお、もっとも新しい時期の遺構は、南北方向にはしる溝やそれに直交する土坑列やピット群で構成されているので、SD3・9・14もそれと同時期の可能性はあるものの、出土遺物に明治期に下るものはなかったので、次節では、第Ⅱ期の遺構とともに解説をしている。

以下、個別に略述する遺構は、主として第Ⅱ期でも古い段階のものである(図4)。

調査区中央南辺に群在していた井戸・野壺のうち(図版3-1)、SE1・2・4・5・13・14は漆喰製の野壺。SE1はSE13を、SE4はSE5を、SE5はSE14を、それぞれ切っているが、いずれも出土遺物には明確な時期差を認められない。SE16は、円形の土坑で、木製の野壺と思われる。SE3(図版3-2、図6)は石組の井戸で、SE14を切っている。井戸底の標高は、43.1m。廃絶後には、残存する井筒の中位と水溜に、人の胴体ほどの大きさの花崗岩塊が落とし込まれていた。いずれも接合関係にはなかった。SE6も石組の井戸で(図版3-3)、井戸底の標高は42.1m。石組は10段前後しか残っておらず、上部をかなり削平されているので、SE13に先行していたと思われる。石組を構成する礫種には花崗岩はほとんど含まれない。

SE15は、調査区の西辺中央で検出された石組の井戸で(図版3-4)、井戸底の標高は43.8m。これも石組の石材に花崗岩をほとんど認められない。調査区中央北辺で検出された直径50cmに満たない土坑SP1からは、残存率の高い京焼の土瓶1点が出土した(図版3-5、図12-I 223)。SX1も調査区中央北辺で検出された遺構で、10cm四方程度に割られた棧瓦が100点あまりまとまって出土した(図版3-6)。接合するものはほとんどなかった。SX3は、調査区東北辺で検出された長方形の土坑。拳大の礫が多く出土したが、井戸のような掘り込みは認められなかった。

京都大学病院構内A G 13区の発掘調査

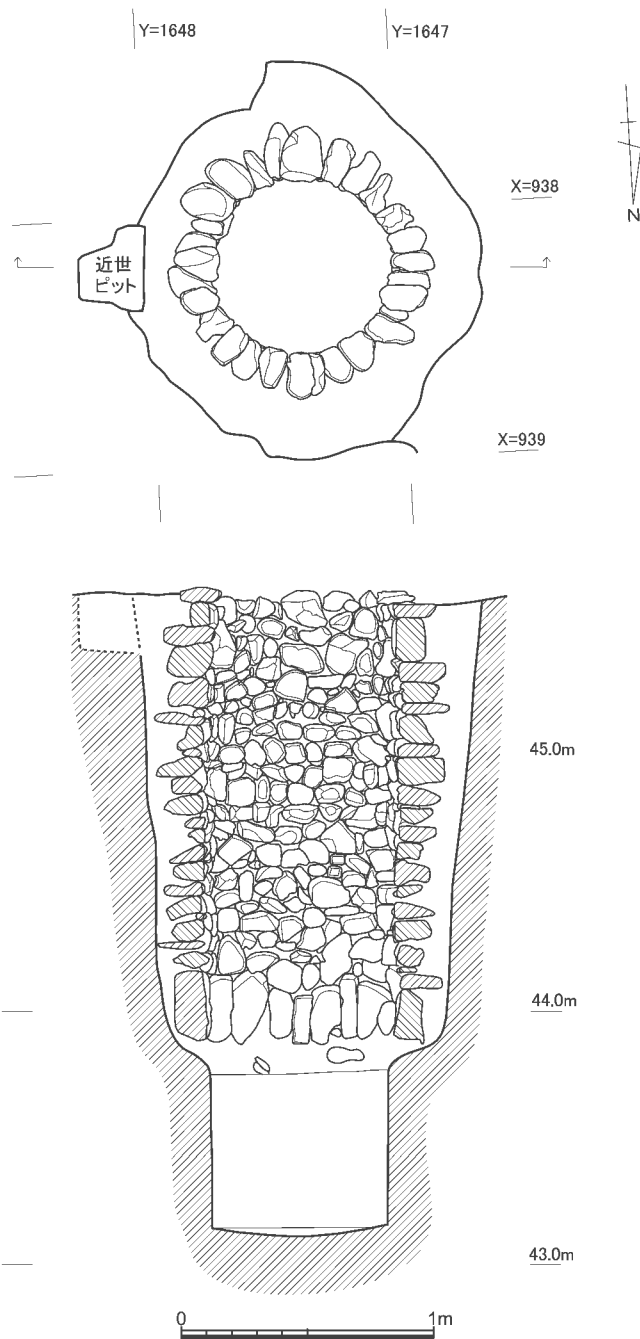


図6 井戸SE3 縮尺1/30

4 遺物

出土遺物は、整理箱123箱を数えるが、その大半は近世～近代の遺物である。近世～近代の遺物は、土器・陶磁器類を中心に、土製品・瓦類・青銅製品・鉄製品など多岐にわたっている。遺構出土遺物は、17世紀後半～18世紀前半（第Ⅰ期）、18世紀後半～19世紀中葉（第Ⅱ期古）、19世紀後半以降（第Ⅱ期新）の3期に大別できるが、量的に多いのは18世紀後半～19世紀中葉のもので、そのなかでも幕末期の資料が主体を占めている。

ここでは、遺構出土の遺物を中心に報告し、土製品・銭貨にかんしては包含層出土品もあわせて解説しておきたい（図版4・5、図7～21）。

SE21出土遺物（I1～I44） I1～I6は土師器皿。見込みに圈線をもたないI1～I4と圈線をもつI5・I6があり、圈線のない皿は口径5.5cmのI1、9～10cm台のI2～I4に細分できる。圈線をもつ皿の口径は10.5cm前後である。I5は口縁端部および底部内外面に煤が付着しており、灯明皿として用いられたものであろう。I7は口径2.4cm、高さ2.2cmを測る土師器の壺。灰白色を呈し、手づくねで成形されている。伏見稲荷門前で売られていた「つぼつぼ」とみてよいだらう〔堀内2001〕。I8は土師器炮烙。口縁端部は丸くおさめ、口縁部内外面ともに横撫で調整を施す。難波洋三分類のD類に比定することができる〔難波1992〕。

I9～I19は陶器椀。I9・I10・I17・I18は肥前系とみられ、それ以外は京・信楽系の製品であらう。I9は見込みを蛇の目釉剥ぎしている。I10は褐色を呈する粗い胎土で、鉄絵で文様を描いたのち施釉する。外面の釉が十分溶けきらなかったためか白濁している。I16は色絵の椀で、残存部分では青と緑の着彩がみられる。I17は高台の高い呉器手の椀とみられ、高台畳付けを除いて全面施釉している。I18は白土を用いて内外面とも直線文様を描いている。I19は見込みに鉄絵で文様を描いている。

I20は外面に鉄釉を施した陶器壺。I21は内外面に鉄釉を施した陶器鍋。I22は陶器鉢。肥前系で、見込みに白土を象嵌した文様をもつ。I23は備前焼で壺か。底面に、円形の刻印をもつ。I24は陶器の壺の類か。胎土は灰白色を呈し外面に半透明の釉を施すが、縦方向の縮みが生じている。I25～I27は陶器すり鉢。I25・I26は堺系とみられ、口縁部外面が縁帯状となり突出する内面に1条の沈線がめぐっている。I27は中世の備前すり鉢であり、混入品であらう。

I28～I44は磁器。I28～I31・I33～I41は椀の類で、I42～I44は皿。I32は袋状

の口縁部形態を呈する。壺の類であろうか。I 33は型紙刷り。I 34・I 43は外面に青磁釉を施しており、I 43は口錆とする。

SE19出土遺物 (I 45～I 54) I 45は口径5.8cmを測る土師器小皿。I 46は土師器鍋。外型を用いて成形しており、内面は回転横撫で調整、口縁端部は面取る。口径約29cm。口縁部外面を中心に煤が厚く付着する。I 47は軟質施釉陶器の鬢水入れ。全面に透明釉を施している。I 48は陶器すり鉢。底面のすり目は、クロスパターンをとっており、堺系とみてよい。I 49は焼き締め陶器の甕。口縁部外面が縁帯化し頸部は短く胴部が張る形態を呈する。胴上部に井桁状のヘラ記号をもつ (図版4左上)。備前焼であろう。

I 50・I 51は磁器椀。I 51は口縁部が端反りとなる小椀で、コンニャク印判による菊花文を施している。「大明年製」の底裏銘をもつ。I 52は磁器皿で、見込みを蛇の目釉剥ぎとしている。I 53・I 54は磁器染付。段重の蓋で、いずれもつまみの部分を欠損している。

SE20出土遺物 (I 55～I 62) I 55・I 56は見込みに圈線をもつ土師器皿。I 57～I 61は陶器。I 57は鉄釉を施す壺。I 58は土瓶の蓋。I 59は鉢で、見込みに白泥と鉄絵で、梅花文を描いている。I 60は灰釉を施した椀。I 61は、肥前京焼風の椀。見込みに山水楼閣文を描き、「清水」の刻印を底部にもつ。I 62は磁器染付の小椀。

SE18出土遺物 (I 63・I 64) I 63は口径31cmをはかる土師器鉢。面取りする口縁端部は、内側へ肥厚する。外面は磨き、内面は横撫調整である。I 64は磁器染付の小椀。口縁部が端反りとなる。

SX4出土遺物 (I 65～I 71) I 65・I 66は土師器の皿で、I 66は見込みに圈線がめぐる。I 67は土師器焼塩壺の蓋。内面に布目痕が残る。I 68は土師器の蓋。I 69・I 70は陶器碗で、I 70は見込みに鉄絵で草花文を描く。I 71は磁器染付の小椀。

SE21・SE19・SE20・SE18・SX4出土の遺物は、おおむね17世紀後半以降18世紀前半までのものである。

SE16出土遺物 (I 72～I 83) I 72は土師器皿。I 73は口径3cm、高さ2cmをはかる土師器小壺。灰白色を呈し、手づくね成形である。「つぼつぼ」の一種か。I 74は陶器椀の底部。I 75は陶器灯明受け皿。I 76は鉄釉を施した壺の口縁部。I 77は焼締陶器の鉢。底部と胴部の境に、反時計回りの削りで面取りを施している。I 78は内外面ともに鉄釉を施した陶器甕。I 79～I 83は磁器。I 79は椀蓋で、内面染付、外面は色絵を施す。I 80はくらわんか椀。I 81・I 82は外面に青磁釉を掛けている。

SE15出土遺物 (I 84～I 93) I 84は見込みに圈線をもつ土師器皿。I 85は焼締陶

遺 物

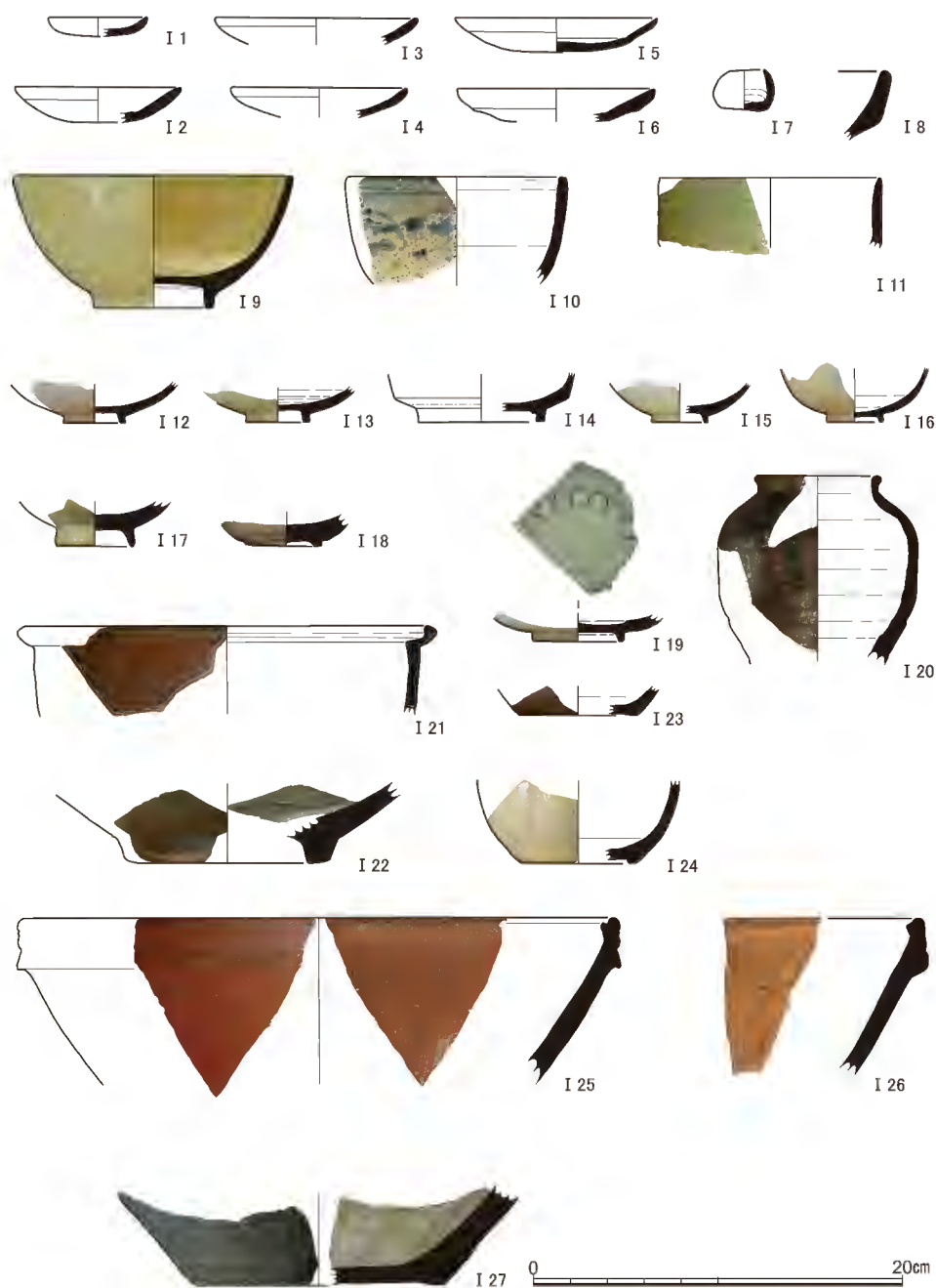


図7 SE21出土遺物(1) (I 1~I 8土師器, I 9~I 27陶器)

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

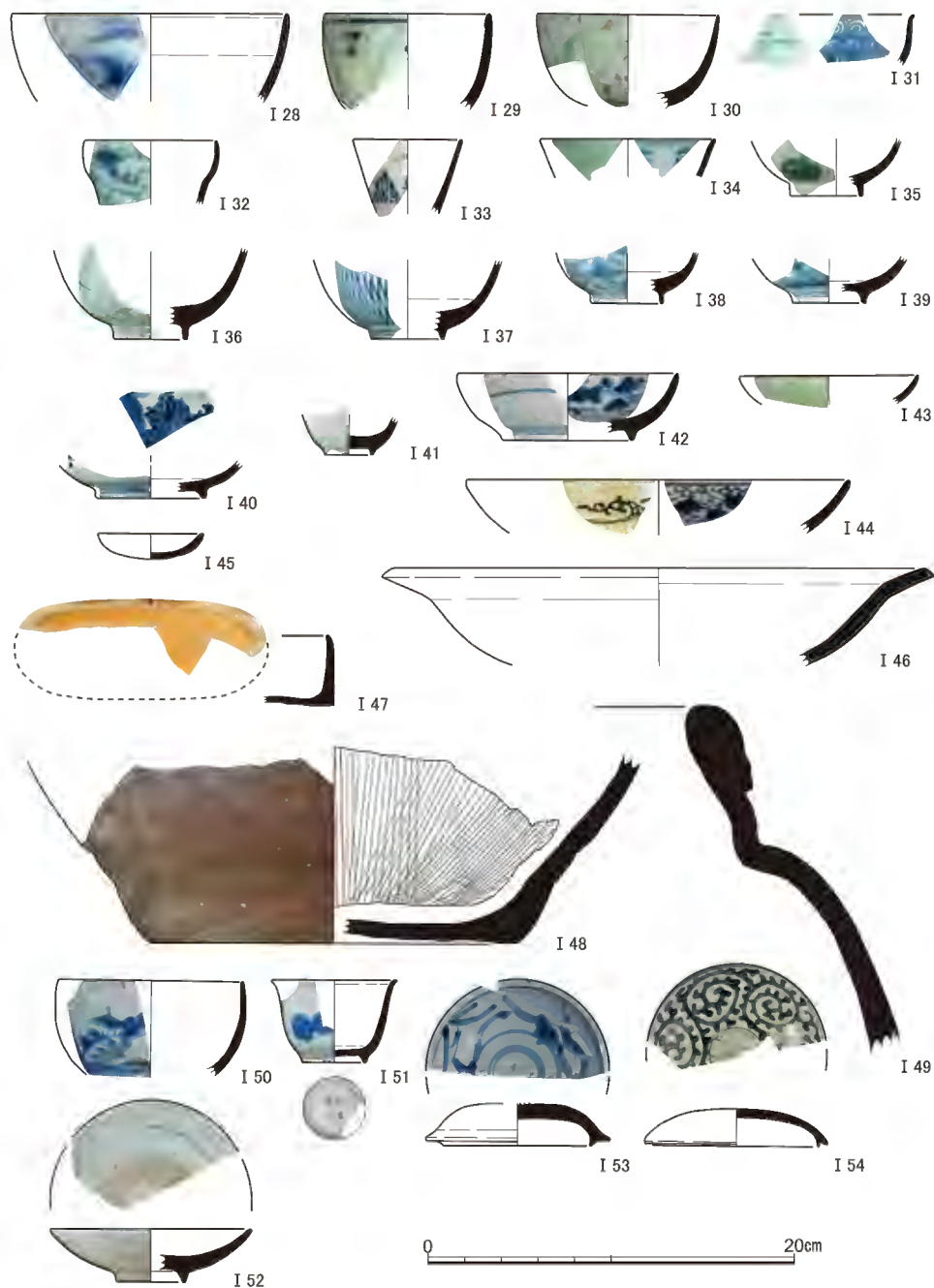


図8 S E 21出土遺物(2) (I 28~I 44磁器), S E 19出土遺物 (I 45・I 46土師器, I 47~I 49陶器, I 50~I 54磁器)

遺 物

器で、底面から胴下部に削りによる調整痕を残している。I 86・I 87は陶器碗。ともに、胴中位で屈曲するタイプで、I 87は鉄絵をもつ。I 88～I 90は磁器。I 88は小椀で、赤絵を施す。I 89はくわんか椀。I 90は皿。見込みに文様を描く。I 91は土師器鍋。外型を用いた成形で、口縁端部は面取りする。外面に煤が付着する。I 92は土師器鉢。I 93は陶器鉢で、見込みに白土を用いて波状文を描いている。

SE 14 出土遺物 (I 94～I 106) I 94は見込みに圏線をもつ土師器皿。I 95・I 96は陶器椀。I 96は茶・緑・黄を用いた上絵をもつ。I 97～I 106は磁器。I 97～I 102は椀で、I 98・I 100は外面に青磁釉を掛けている。I 103・I 104は皿で、I 104は見込みに蛇の目釉剥ぎとする。I 105・I 106は染付の仏飯。

SE 13 出土遺物 (I 107～I 114) I 107～I 110は土師器皿。いずれも口径10cm前後で見込みに圏線がめぐる。I 109・I 110は口縁端部の半周ほどに煤が厚く付着している。I 111～I 113は陶器。I 111は鉄釉を施した鍋、I 112は杳形の椀、I 113は堺・明石系のすり鉢である。I 114は磁器染付の椀。

SE 5 出土遺物 (I 115・I 116) I 115は鉄釉を施した壺の口縁部。I 116は陶器の鍋蓋。口縁端部を除いて、内外面に灰釉を施している。

SE 1 出土遺物 (I 117) I 117は土師器焼塩壺の蓋。内面に布目痕が残る。

SE 4 出土遺物 (I 118～I 129) I 118は土師器炮烙。難波分類のG類で、外面には煤が付着している。I 119～I 121は陶器。I 119は銅緑釉を施す。徳利形を呈する仏飰具であろう。I 120は灯明受皿。I 121は仏飯の脚部か。底面に回転糸切り痕が残り、垂直方向に焼成前の穿孔をもつ。鉄釉を施す。I 122～I 129は、磁器染付の椀。I 122～I 125は口縁部が端反りとなる。I 126は高い高台の付く広東椀。I 127は線描きによる文様を施している。

SE 3 出土遺物 (I 130～I 145) I 130～I 136は陶器。I 130は椀。判読できないが、胴下部に墨書がある。高台内部から畳付けにかけて墨が付着しているため、墨溜のようを用いた可能性がある。I 131は皿。I 132は煎茶椀。錆絵で16弁菊花文を描いている。I 133は鍋、I 134は鍋の蓋。I 135は水注の蓋か。I 136は土瓶の蓋。白化粧したうえに、茶・緑で文様を描いている。I 137～I 144は磁器の椀。I 140・I 141は外面に青磁釉を掛けている。I 144は見込みに赤の上絵を施す。I 145は砥石。

SE 6 出土遺物 (I 146～I 187) I 146～I 154は土師器皿。I 146～I 151は見込みに圏線がめぐる。I 147は見込み、I 148は口縁端部に煤が付着する。I 155～I 157・I 165

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

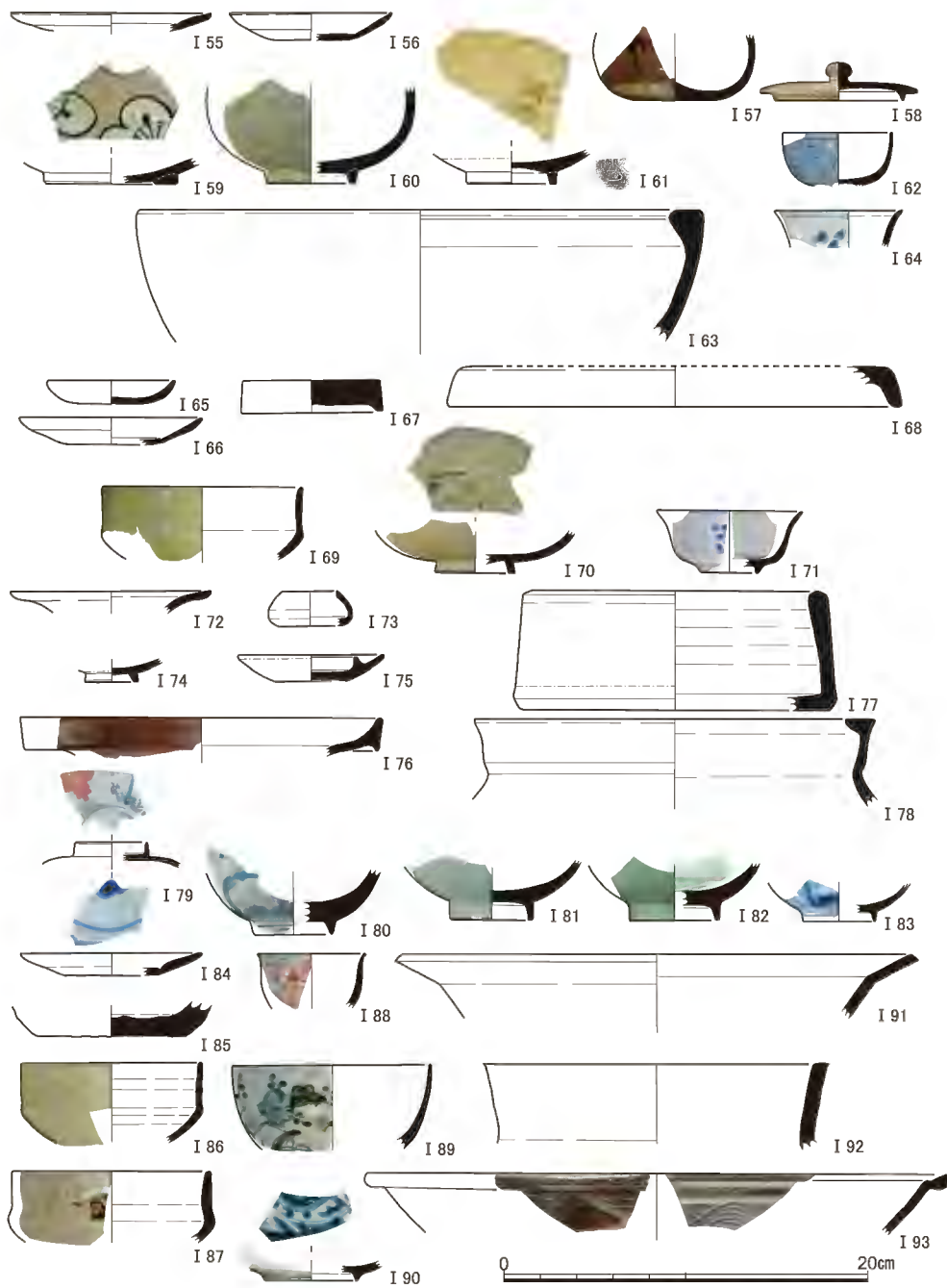


図9 SE20出土遺物 (I 55・I 56土師器, I 57～I 61陶器, I 62磁器), SE18出土遺物 (I 63土師器, I 64磁器), SX 4出土遺物 (I 65～I 68土師器, I 69・I 70陶器, I 71磁器), SE16出土遺物 (I 72・I 73土師器, I 74～I 78陶器, I 79～83磁器), SE15出土遺物 (I 84・I 91・I 92土師器, I 85～I 87・I 93陶器, I 88～I 90磁器)

遺 物

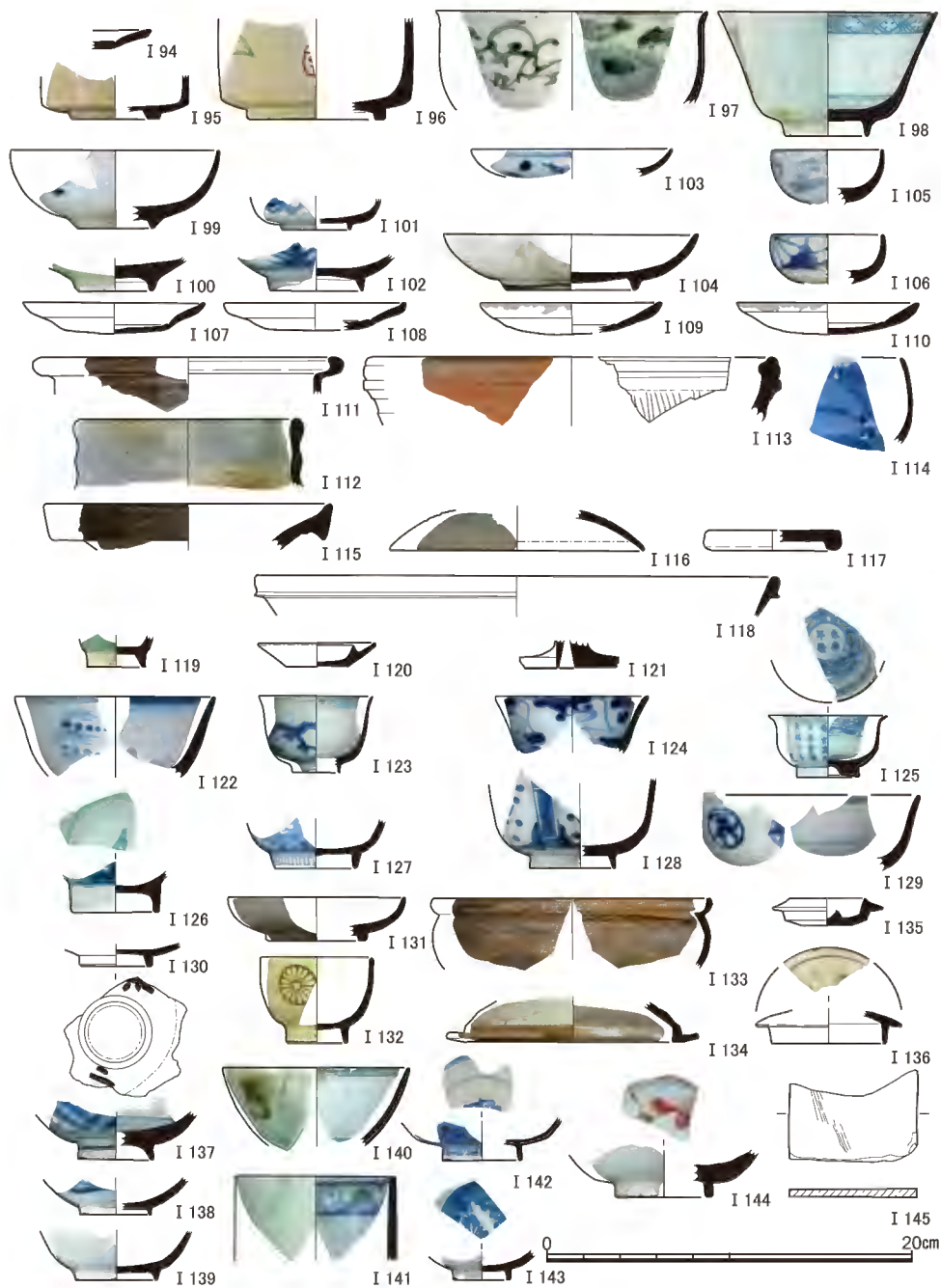


图10 SE14出土遺物 (I 94土師器, I 95·I 96陶器, I 97~I 106磁器), SE13出土遺物 (I 107~I 110土師器, I 111~I 113陶器, I 114磁器), SE 5 出土遺物 (I 115·I 116陶器), SE 1 出土遺物 (I 117土師器), SE 4 出土遺物 (I 118土師器, I 119~I 121陶器, I 122~I 129磁器), SE 3 出土遺物 (I 130~I 136陶器, I 137~I 144磁器, I 145砥石)

京都大学病院構内A G 13区の発掘調査

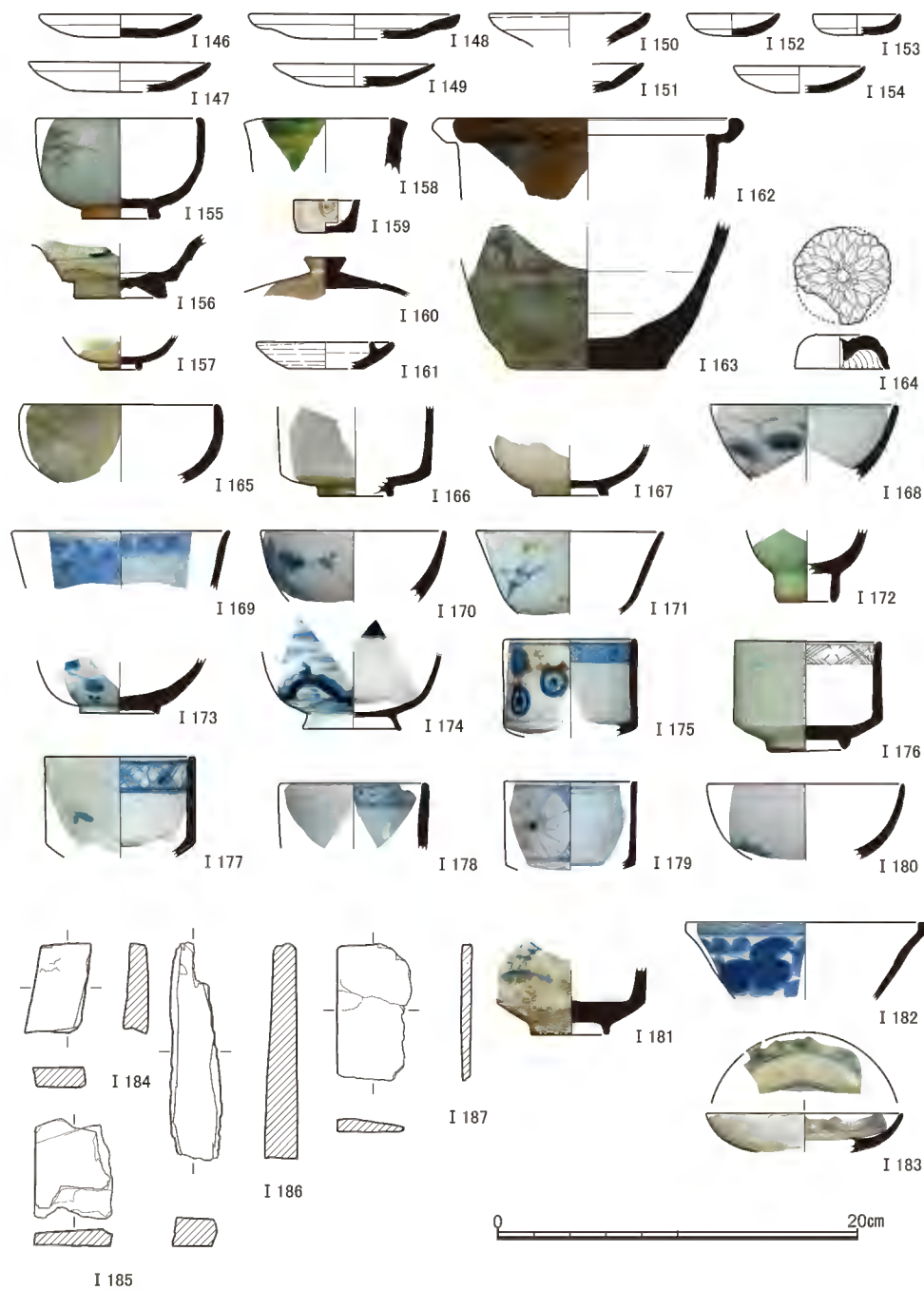


図11 SE 6 出土遺物 (I 146~ I 154土師器, I 155~ I 167陶器, I 168~ I 183磁器, I 184~ I 187砥石)

遺 物

～I 167は陶器碗。I 158・I 159は軟質施釉陶器。I 158は緑釉，I 159は透明釉を内外面に施している。I 160は陶器蓋。I 161は陶器灯明受皿。I 162は陶器鍋。内外面に鉄釉を施す。I 163は陶器の壺ないしは瓶の底部。鉄釉を施している。I 164は無釉陶器の蓋。型作りで，内外面ともに離型材の雲母が付着する。I 168～I 183は磁器。I 168～I 171・I 173～I 175・I 177・I 179・I 180・I 181は染付の碗。I 172は内外面に青磁釉を施す小碗。I 176・I 178は外面に青磁釉を施す青磁染付の碗。I 182は染付の蓋物。口縁端部の釉をかきとる。I 183は皿。I 184～I 187は砥石。

SE 2 出土遺物 (I 188～I 200) I 188は土師器炮烙。外型成形で，口縁部と体部の境を面取りしている。I 189・I 190は鉄釉を施す陶器鍋。I 191は陶器灯明皿。口縁部内面に，菊花の貼り付けをもつ。I 192～I 194は陶器蓋で，I 192・I 193は鉄釉を施し，I 194は銹絵を描いた後，透明釉を掛けている。I 195は青磁染付の鉢。底面は蛇の目凹形高台である。I 196～I 200は磁器染付の碗。I 199は焼継されており，底裏に，焼継と同じ原料で「ヒ川一」と見えるマークを入れている。

SX 3 出土遺物 (I 201～I 222) I 201は陶器甕。I 202は陶器灯明受皿。I 203・I 204は陶器灯明皿。内面に櫛描沈線をもつ。I 205～I 207は陶器碗。I 205・I 206は口縁部が端反となる碗で，ともに内面を白化粧した後，施釉している。I 207は胴下半から底部にかけて残存している。外面は露胎であり，鉄錆を用いて胴部および底裏に文字を書いているが，判読できていない。I 208・I 209は陶器蓋。I 210～I 222は磁器。I 210・I 212・I 213～I 215・I 217～I 221は染付の碗。I 215は焼継されている。I 211は上絵，I 222は上絵染付の碗。I 222は焼継の痕跡を残す。I 216は白磁の紅皿。

SP 1 出土遺物 (I 223) I 223は陶器土瓶。口径6.5cm，器高10cmをはかる。注ぎ口と体部・底部の一部を欠損する。白化粧したのち，茶・緑を用いて文様を施している。

SD 14 出土遺物 (I 224～I 231) I 224は陶器灯明皿。内面に櫛描沈線文をもつ。口縁端部外側に煤が付着する。I 225は陶器灯明受皿。I 226は肥前京焼風陶器の底部片で，底裏に「木□(下カ)弥」の刻印をもつ。I 227は備前焼広口壺。I 228～I 231は磁器。I 228は染付の仏飯。I 229は白磁の紅皿。I 230は染付の碗で，焼継をしている。I 231は染付の鉢。

SD 9 出土遺物 (I 232～I 235) I 232は陶器煎茶碗。高台に切り込みをもつ。I 233～I 235は磁器。I 233・I 234は染付の蓋と碗。I 235は白磁紅皿。

SD 8 出土遺物 (I 236～I 239) I 236は陶器灯明皿。口縁部外面に煤が付着する。

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

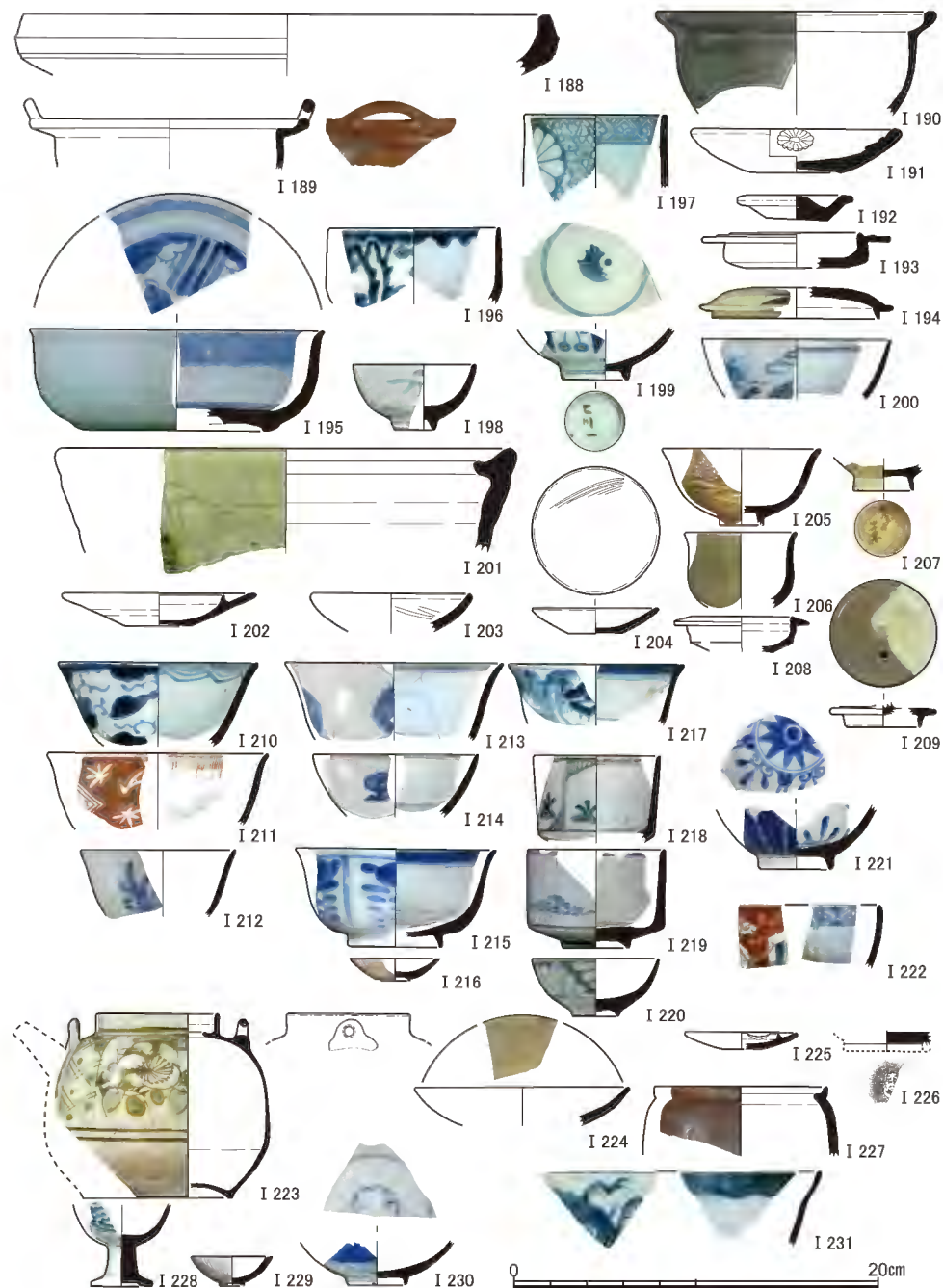


図12 SE 2 出土遺物 (I 188土師器, I 189~I 194陶器, I 195~I 200磁器), SX 3 出土遺物 (I 201~I 209陶器, I 210~I 222磁器), SP 1 出土遺物 (I 223陶器), SD14 出土遺物 (I 224~I 227陶器, I 228~I 231磁器)

遺 物

I 237～I 239は磁器染付の椀。

SD 3 出土遺物 (I 240～I 249) I 240は見込みに圈線のめぐる土師器皿。I 241は土師器炮烙。難波分類のG類。I 242は軟質施釉陶器のミニチュア椀。内面に、緑釉を施している。I 243は陶器皿。I 244・I 245は陶器椀。I 246は備前焼広口小壺。I 247は土瓶蓋。I 248は磁器染付の皿。口銹を施している。I 249は磁器染付の蓋物。口縁端部の釉をかきとっている。

SD 2 出土遺物 (I 250～I 254) I 250は陶器灯明受皿。I 251・I 252は陶器の鍋と蓋。I 252は白泥を用いて、いっちゃん描きしている。I 253・I 254は磁器染付の椀。ともに口縁部が端反りとなる。

SD 1 出土遺物 (I 255～I 264) I 255からI 262は陶器。I 255～I 257は灯明皿。内面に、I 255は櫛描文、I 257はボタン状の貼り付けをもつ。I 258は灯明受皿。I 259・I 260は土瓶の蓋。I 259は白泥を用いて、いっちゃん描きした後、I 260は白泥と銹絵を施した後、透明釉を施釉している。I 261は水注の蓋か。I 262は蓋物。I 263・I 264は磁器で、I 263は蓋、I 264は椀である。

SE 4・SE 3・SE 6・SE 2・SX 3・SP 1・SD 14・SD 9・SD 8・SD 3・SD 2・SD 1は18世紀後半以降19世紀中葉ごろまでの年代が与えられる。

SD 13 出土遺物 (I 265～I 269) I 265は灰釉を施す陶器の蓋。仏餉具の水玉の蓋であろう。I 266は磁器染付の椀。I 267は磁器上絵染付の盃。I 268は磁器染付の湯飲み茶碗。銅板によるプリントである。I 269は磁器染付の皿。

SE 10 出土遺物 (I 270～I 275) I 270～I 275は磁器。I 270～I 272は染付の椀で、I 271は銅板プリント、I 272は型紙刷りである。I 273は染付の皿で、見込みの文様は型紙刷り。I 274は赤絵の椀。I 275は染付の皿。

SD 13・SE 10は明治時代に下る遺物である。

土 製 品 (I 276～I 547) 遺構および遺物包含層から出土したおもな土製品を解説しておく。

I 276～I 311は人形の類。モチーフは、人物を象ったもの (I 276～I 299) と、狛犬・狐・猿・牛馬・魚・蛙など動物を象ったもの (I 300～I 311) に大別できる。土師質のものが主体を占めるが、陶製 (I 300) および軟質施釉陶製 (I 286・I 287・I 290・I 292・I 294・I 303・I 307・I 310) もある。後者には、透明釉のみ施す場合と、I 286・I 290・I 292のように部分的に緑彩を施した後に透明釉を施す場合、I 303のように底面を除く全

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

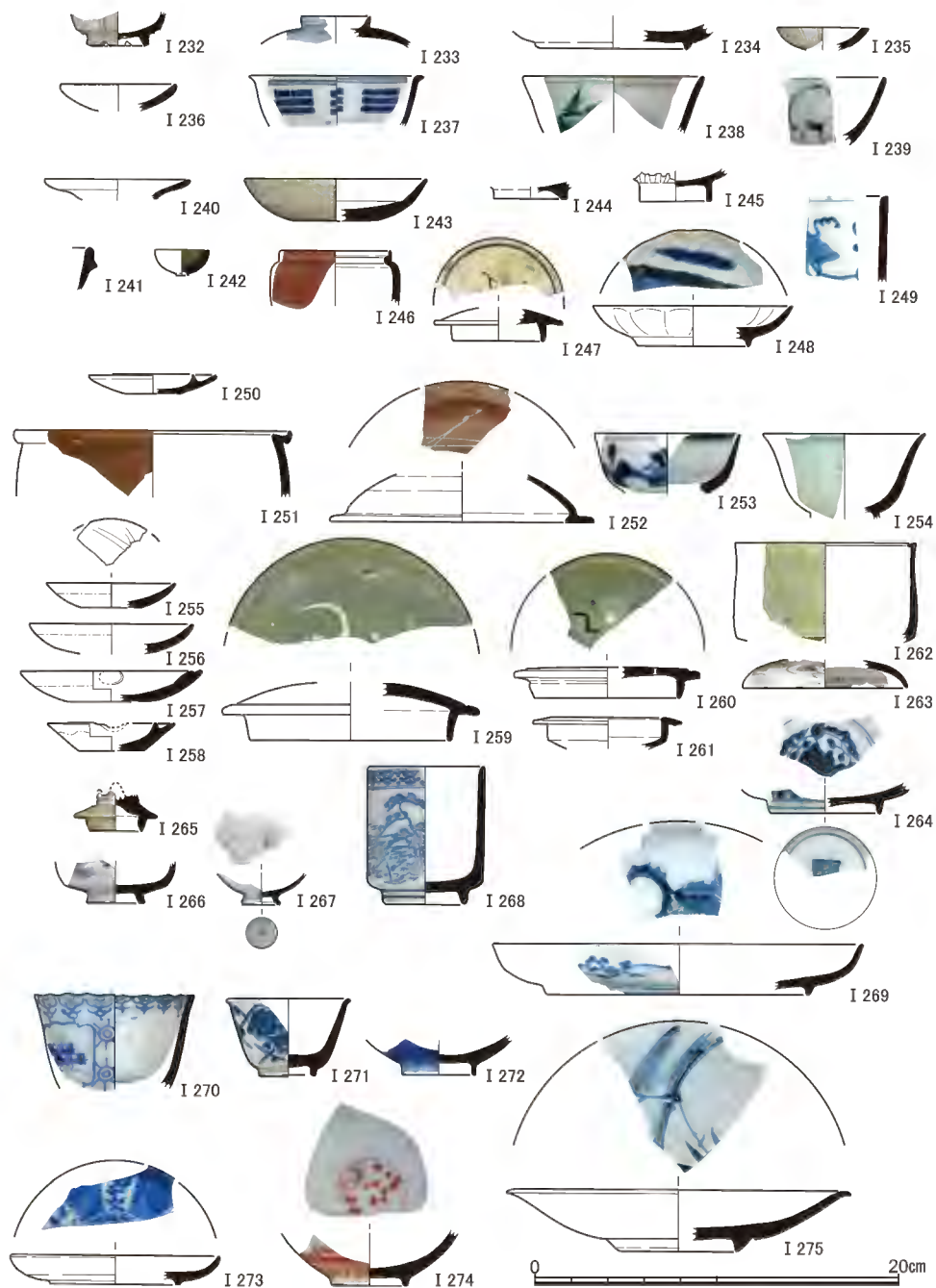


図13 S D 9 出土遺物 (I 232陶器, I 233~I 235磁器), S D 8 出土遺物 (I 236陶器, I 237~I 239磁器), S D 3 出土遺物 (I 240・I 241土師器, I 242~I 247陶器, I 248・I 249磁器), S D 2 出土遺物 (I 250~I 252陶器, I 253・I 254磁器), S D 1 出土遺物 (I 255~I 262陶器, I 263・I 264磁器), S D 13 出土遺物 (I 265陶器, I 266~I 269磁器), S E 10 出土遺物 (I 270~I 275磁器)

遺 物

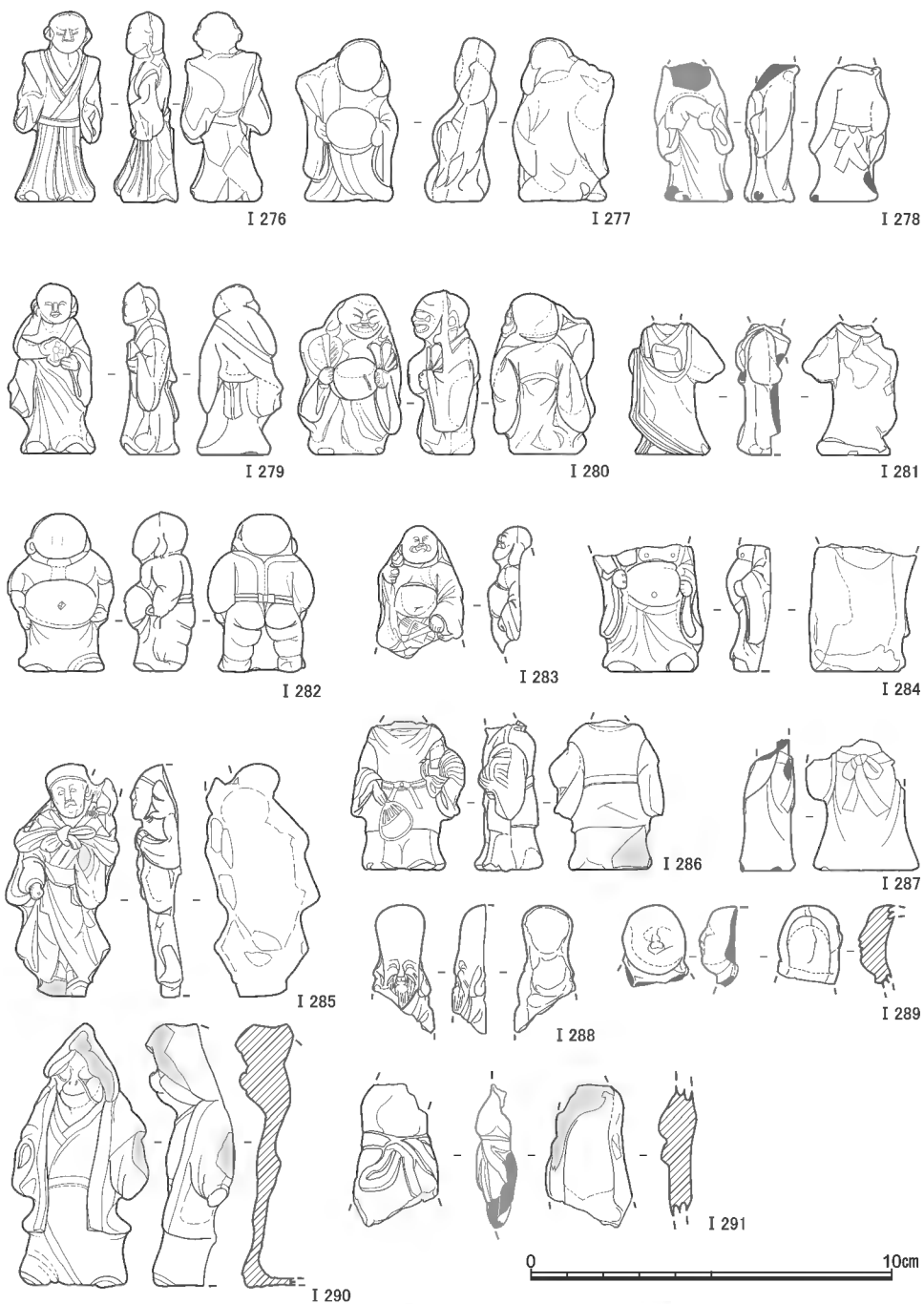


図14 土製品(1) (I 276~ I 291人形) 縮尺1/2

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

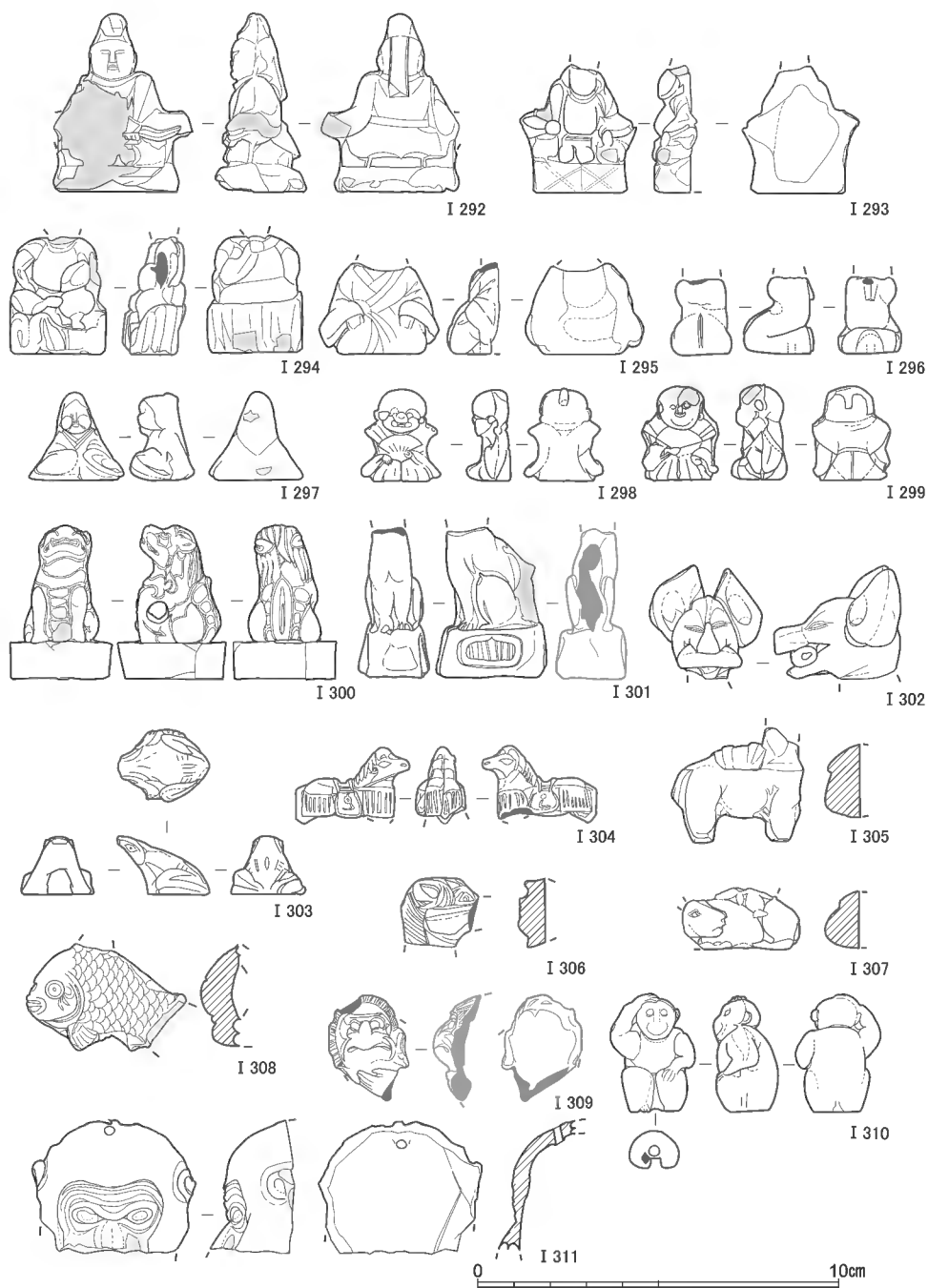


図15 土製品(2) (I 292~I 311人形) 縮尺1/2

遺 物

面に緑釉を施す場合がある。

土師質のものでは橙褐色を呈する胎土と灰白色を呈する胎土が認められるが、施釉品は、いずれも灰白色を呈する胎土を用いている。成形は、正面と背面をそれぞれ型で作った後、貼り合わせるものがほとんどであるが、I 296は手捻り成形である。型合わせのものは、中が中空タイプと中実タイプの2種類が認められる。

これらの中には、径2～3mmの小孔を底面中央から上方へ向けてあけているものがある。これは施釉品（I 287・I 310）、土師質品（I 276・I 278・I 279・I 281・I 296・I 299）のいずれにも認められる。施釉品は中空タイプ（I 287）と中実タイプ（I 310）ともにみられるが、小孔をもつ土師質品はすべて中実タイプである。

I 312～I 314は円錐形を呈する土製品。直径3～3.5cm、高さ2～2.5cm。I 313は全面に離れ砂が付着しており、I 312・I 314も含めて、型作り成形と考える。I 313は側面に溝がらせん状にめぐり、I 312は5条、I 314は8条の小溝が同心円状にめぐっている。I 313は上面にも型押し痕跡が残るが、I 312・I 314は指押さえて成形しており、I 314は指紋の痕跡が顕著に残っている。

I 315～I 317はミニチュアのままごと道具。いずれも型作りである。I 315は白色の胎土を用いた土師質の七輪。I 316は土師質羽釜。鏝の部分で上下分割し型作りしたのち、貼り合わせている。離型材の雲母が付着している。I 317は軟質施釉陶器の片口。内面に透明釉を施している。

I 318は土師質の鳩笛。型作りで、黒・茶の着彩が一部に残っている。I 319・I 320は土師質の男根状土製品。I 319は灰白色、I 320は橙褐色を呈する。

I 321～I 547は泥面子の類。I 321～I 331は、芥子面と呼称されるもので、人物や動物などを型抜きしている。90点出土。全長は0.8cm～4.8cm、最大幅は1.5cm～4.0cmまでであるが、長さ、幅ともに2cm台のものが多数を占める。体全体を表現しているI 323を除いて、顔面のみを表現している。裏面は、指押さえて成形しているため多少の凹凸はあるものの、おおむね平坦であるが、図示したI 329を含めて、内側に大きく凹んでいるものが7点ある。色調は、I 329が灰白色を呈する以外は、淡橙色～赤褐色を呈している。I 332～I 547は、面打（めんちょう）と呼称されるもので、型押しにより上面に文様を施している。885点出土。文様には、文字・家紋・将棋の駒・動物・貨幣など多種多様であり、文様のバリエーションに配慮して掲載した。上面形が円形を呈するもの860点以外に、四角形（I 381・I 457・I 460）、六角形（I 409・I 410・I 412～I 414）、王冠形（I 491・I 547）

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

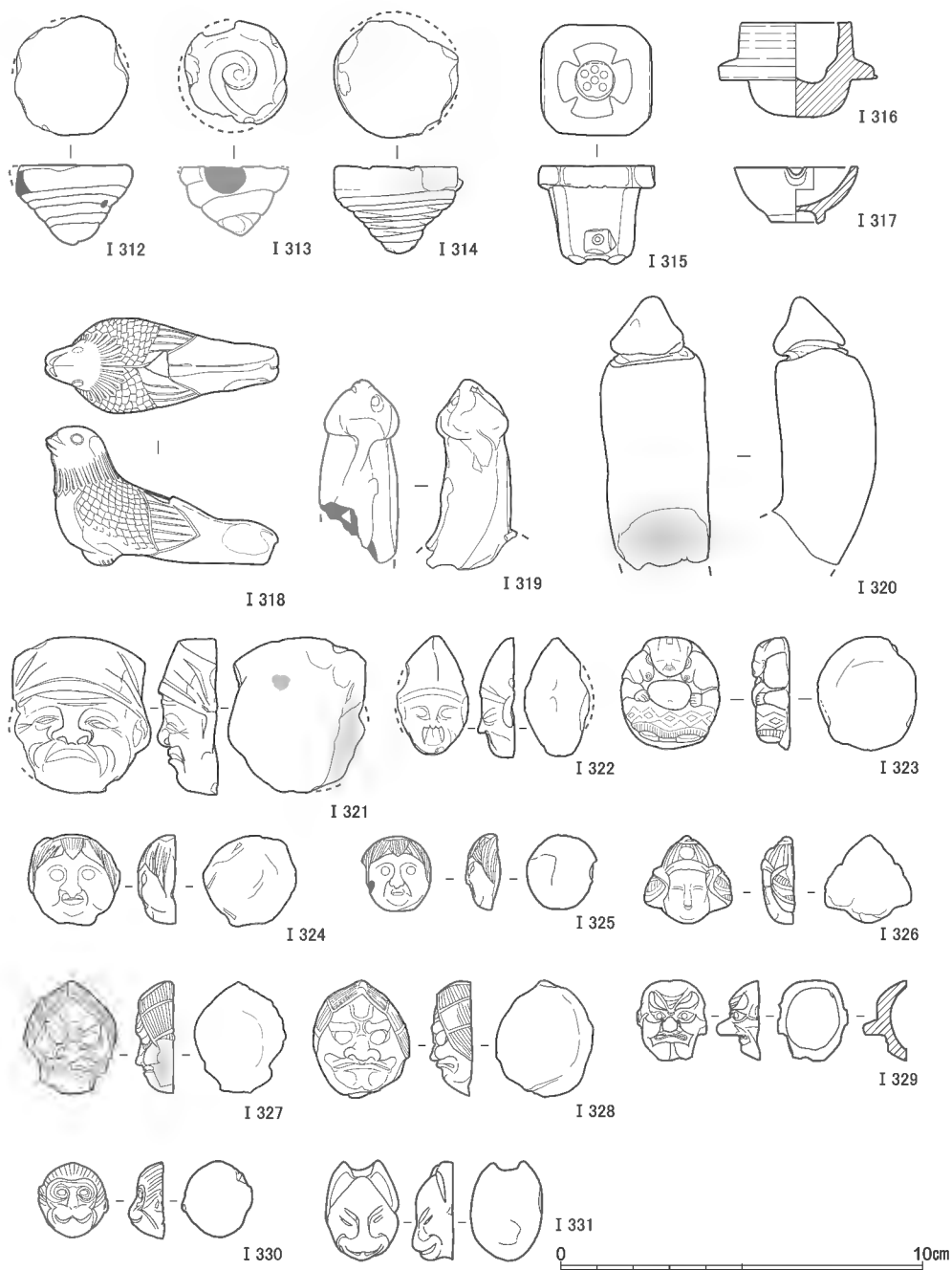


図16 土製品③ (I 312~I 314玩具?, I 315~I 317ミニチュア, I 318鳩笛, I 319・I 320男根状土製品, I 321~I 331泥面子) 縮尺1/2

遺物



图17 土製品(4) (I 332~ I 385泥面子) 縮尺1/2

京都大学病院構内A G13区の発掘調査

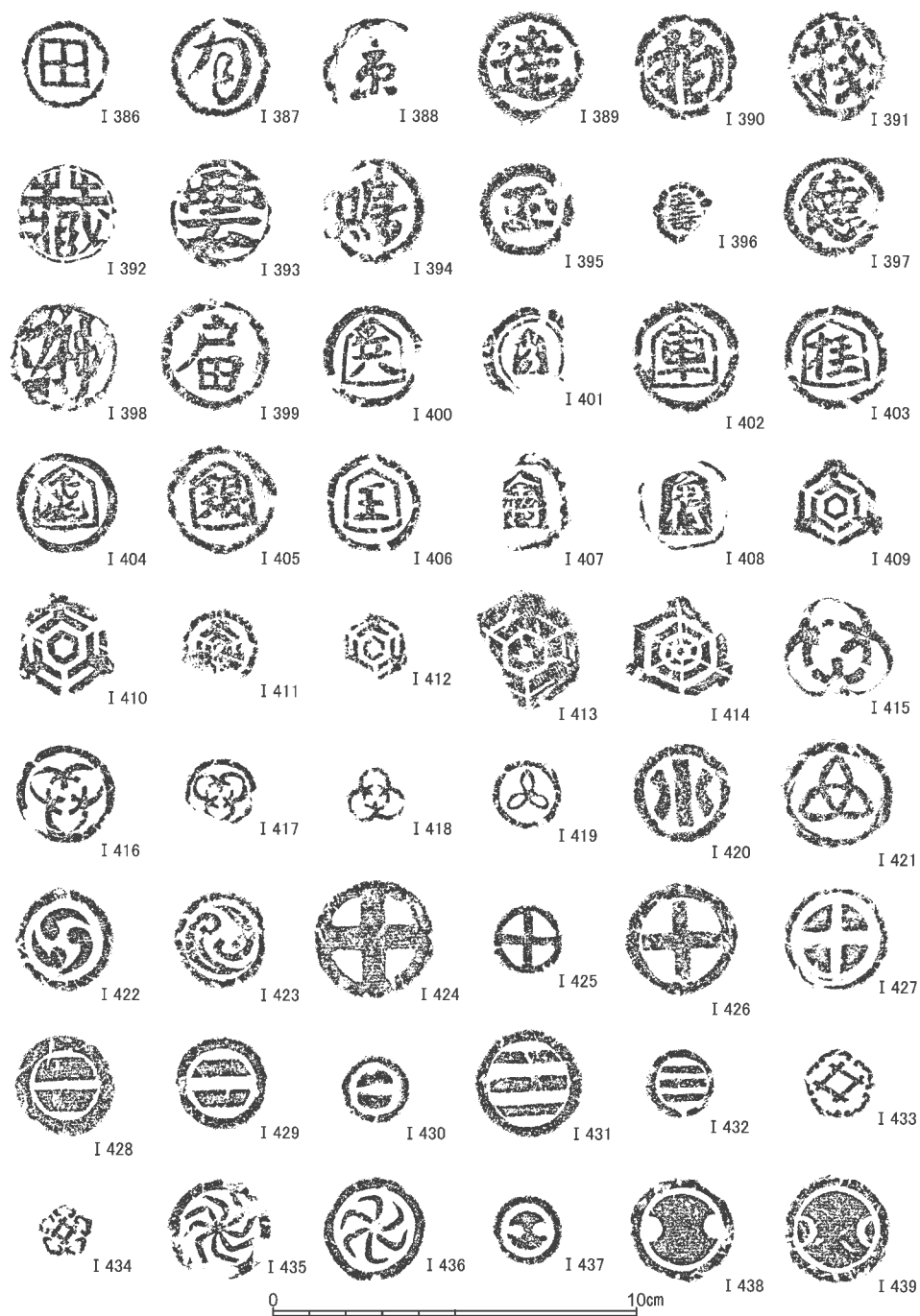


図18 土製品(5) (I 386~ I 439泥面子) 縮尺1/2

遺 物

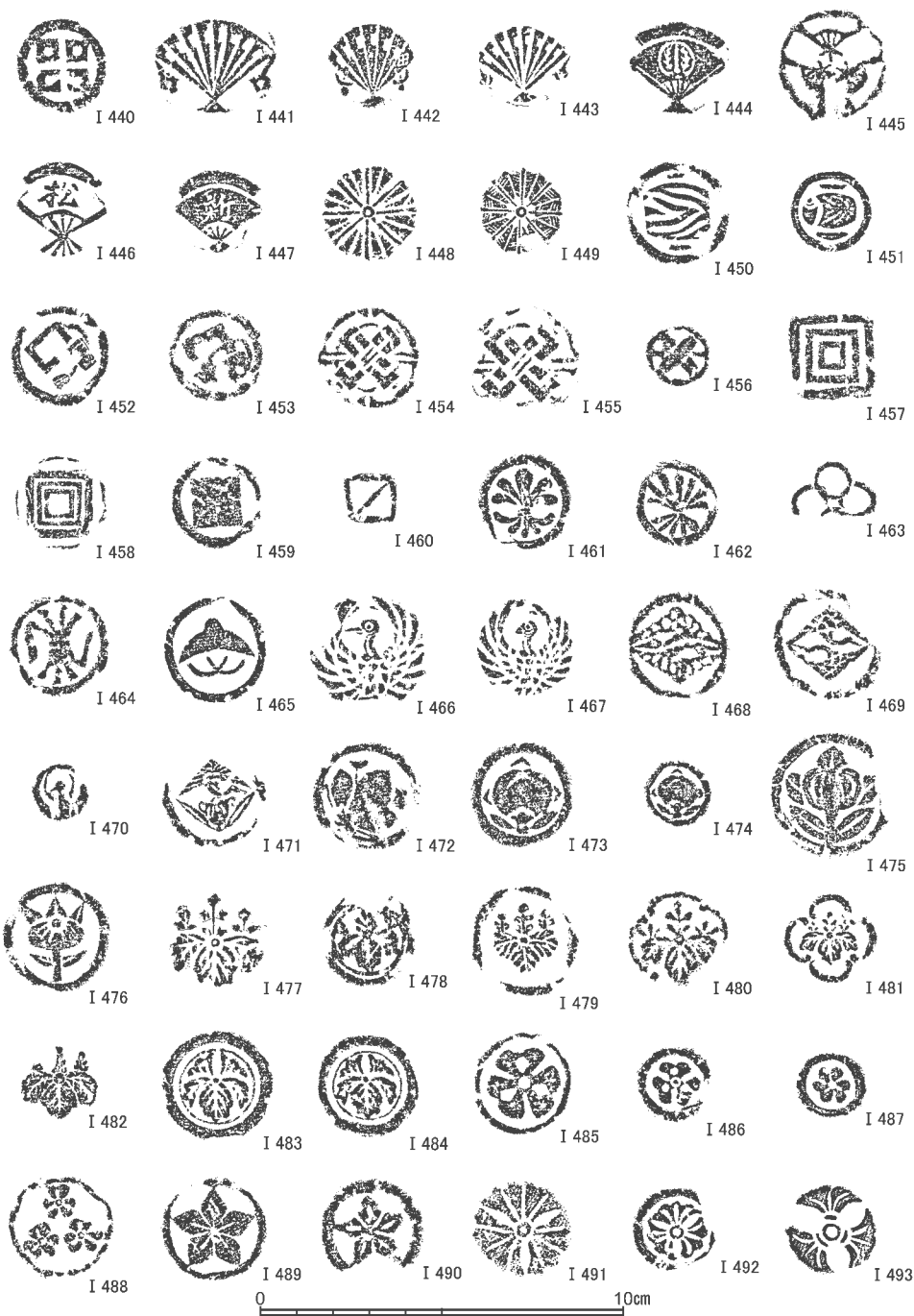


图19 土製品(6) (I 440~ I 493泥面子) 縮尺1/2

京都大学病院構内A G 13区の発掘調査



図20 土製品(7) (I 494~ I 547泥面子) 縮尺1/2

小 結

などが合わせて25点みとめられる。

円形を呈する860点のうち径の判別する673点の大きさは、最小値が直径8.0cm、最大値が47.2cmで、平均値は28.9mmである。5mm区分で度数分布を見てみると、5mm以上10mm未満が1点、10mm以上15mm未満が0点、15mm以上20mm未満が16点、20mm以上25mm未満が56点、25mm以上30mm未満が334点、30mm以上35mm未満が247点、35mm以上40mm未満が14点、40mm以上45mm未満が2点、45以上50mm未満が3点となり、25mm以上35mm未満のものが多数を占めている。

円形以外の四角形・六角形・王冠形も含めた厚み（計測可能点数874点）は、最小値が3.8mm、最大値が14.1mmで平均値は8.2mmである。2mm区分で度数分布を見ると、2mm以上4mm未満1点、4mm以上6mm未満27点、6mm以上8mm未満343点、8mm以上10mm未満423点、10mm以上12mm未満72点、12mm以上14mm未満7点、14mm以上16mm未満が1点となり、6mm以上10mm未満に集中している。

銭 貨（I 548～I 568） 包含層（黒灰色土）より出土した銭貨を一括して報告する。I 548は洪武通宝。I 549～I 566は寛永通宝。I 549は背面に十一波をもつ四文銭、I 550～I 566は無背銭である。I 567は文久永宝。背面に十一波をもつ。

I 568（図版5 - I 568）は二朱金である。縦13.1mm、横8.0mm、厚さ1.6mm、重さは1.5gをはかる。表面には上部に桐文、下部に「二朱」の文字が刻印されており、裏面には上部に「光次」の署名、下部に花押が刻印されている。刻印の特徴などから判断して、天保3年（1832）に発行された天保二朱金ではないかと考える。

5 小 結

今回の調査では、中世から近世・近代にいたる遺構・遺物が発見され、この地一帯の土地利用の変遷を解明するための材料を得ることができた。

遺跡の基盤は粗砂や礫・シルトから構成される。高野川系流路あるいは鴨川によって形成された自然堆積層で、2m以上の厚みをもっている。この堆積物と、ここから出土した遺物の観察から、調査地点は13世紀ごろまでは氾濫原であったが、その後、河原が徐々に西へと移動した結果、16世紀ごろには水がほとんどひいていた状況が明らかとなった。

江戸時代の開発は、このような流路の西への移動と固定化を背景にして始まったと想定できる。江戸時代の遺物包含層は第2層と第3層の2枚を確認できるが、第2層は18世紀後半以降19世紀、第3層は17世紀～18世紀前半の遺物を包含している。また、調査区西辺

京都大学病院構内AG13区の発掘調査

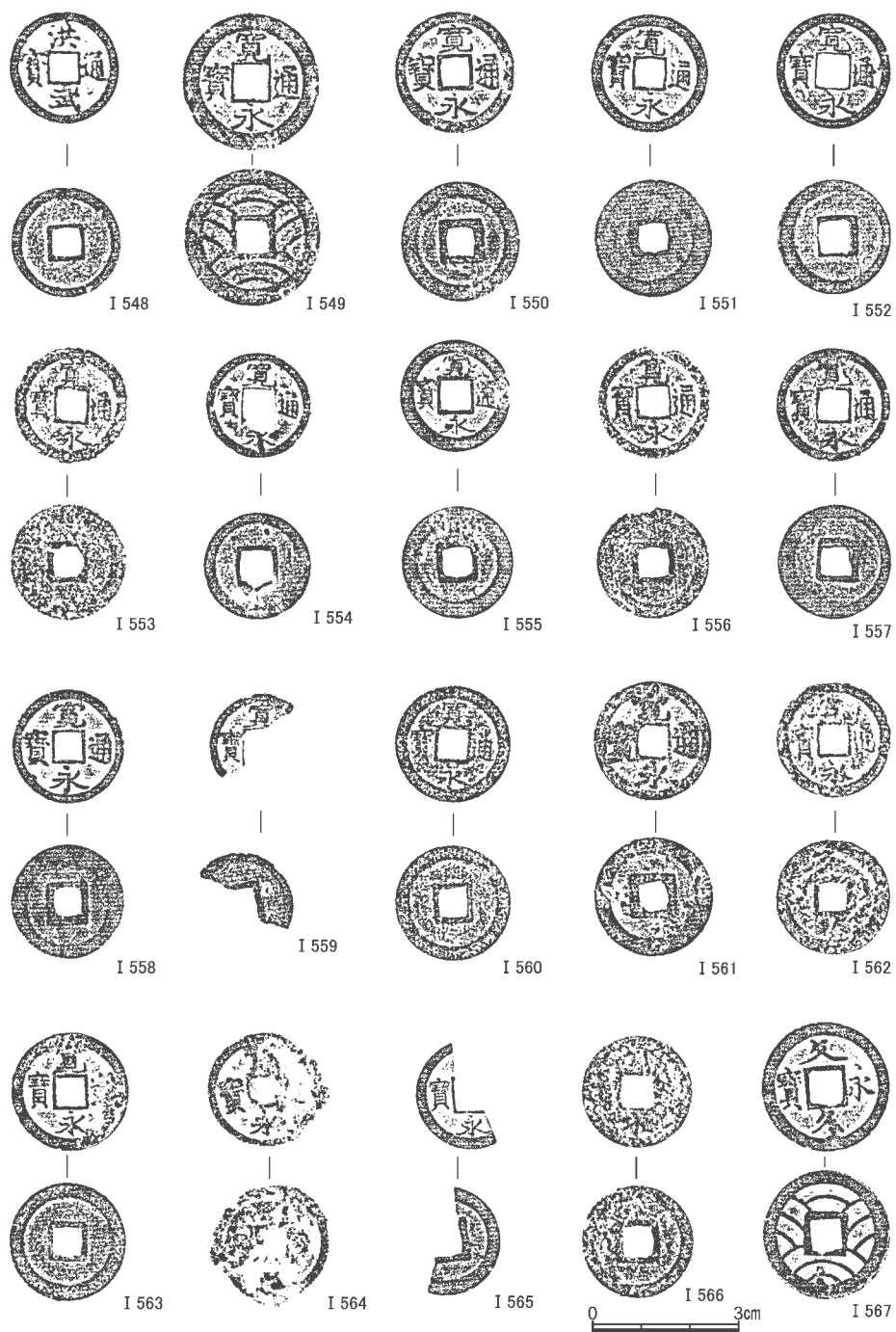


図21 銭貨 (I 548洪武通寶, I 549~ I 566寛永通寶, I 567文久永寶) 縮尺2/3

小 結

で砂礫層の最上部に堆積する黄褐色土は、中世の土器・陶磁器の細片を主体としつつも、江戸時代の陶磁器片も少量包含していた。

このような状況から判断して、17～18世紀前半段階には、農地としての開発が開始されたことがうかがえる。ただし、この段階の遺構は散漫で遺物も少ないことなどから、なお本格的な開発には至らなかったと考えられる。遺構や遺物のあり方から見ると、聖護院村の畑地としての本格的な開発は、18世紀後半以降とみられるだろう。その後この地は、絵図・地積図などによれば幕末に練兵場となり明治期には牧畜場となってから大学敷地へと変遷した。

現地調査および整理作業は千葉豊と富井眞が担当し、磯谷敦子・下坂澄子・長尾玲・中山太良・春日俊成・飯田恵里奈・越坂裕太・菊永苑花・平山珠美・白井健太・工藤二郎・西川華子が測量や出土資料の実測・復元などをおこなった。なお、堆積物観察について、増田富士雄氏（同志社大学）から貴重なご教示を賜りました。末尾ながら、記して感謝いたします。